DOI：10.20776/S24326291-5-P71

スピーチスタイル選択の人間関係構築への影響に関する一考察
―韓国人留学生KSの規範と実際のスタイル選択をデータに―

西住　奏子[1)]・孫　美那[2)]

[1)] 千葉大学大学院国際学術研究院　　[2)] 千葉大学人文社会科学研究科博士後期課程修了

Effects of speech-style choice on building interpersonal relationships: A Korean student's case

NISHIZUMI Kanako　SON Mina

要旨

本研究は、韓国人留学生が日本人大学生と会話する際に、スピーチスタイルに関してどのような規範を持ち、実際その規範がスピーチスタイルの使用にどう現れているかを明らかにすることを目的とする。そのため、日本語上級学習者である韓国人留学生KSと日本人大学生３名とのそれぞれの会話データと、KSへのインタビュー・データを収集した。その結果KSは、初対面であるか、年齢差があるか、親しいかという三つを基準としてスピーチスタイルにおける規範を持っていることが明らかとなった。また、その規範とKSの実際の会話で現れたスピーチスタイルにはズレが生じていた。具体的には、親しくなりたい人に普通体に切り替えられないこと、相手が日本人であることから相手のスピーチスタイルが自分の規範に反していても受け入れること、親しいと思う相手であっても年上であることを重視して丁寧体を使うことが見られた。このことより、韓国人留学生が日本で人間関係を構築する際に、スピーチスタイルの選択が原因で自分が期待する関係が築けていない可能性があると示唆された。

キーワード
スピーチスタイル選択、韓国人留学生、規範、人間関係構築

1．はじめに

日本語と韓国語は複数のスピーチスタイルを持っており、相手との関係性や場面等に合わせたスピーチスタイルを選択して使用する言語である。しかし、両言語のスピーチスタイルは他の言語に比べて似ているものの、同じではない。これまでの日韓のスピーチスタイルの研究から、日本語母語話者と韓国語母語話者間でスタイルの使い分けの規範や場面が微妙にずれていることが指摘されている。よって、日本語と似ているスピーチスタイルの構造をもつ韓国語を母語とする留学生でさえ、日本語のスピーチスタイルの構造を学習したとしても、それを実際どのように使用していいか、混乱することが少なくないと考えられる。本研究は、韓国人留学生が日本で日本人大学生と会話をする際に、スピーチスタイルに関してどのような規範を持ち、それが実際のスピーチスタイルの使用にどう現れているかを明らかにすることが目的である。このことを踏まえ、スピーチスタイルの選択が相手との人間関係構築に及ぼし得る影響について考察する。本稿では日本語学習歴６年の上級話者である韓国人留学生KSを被験者とし、日本人大学生３名とのそれぞれの会話と、それをもとにKSに行ったインタビューをデータに、KSのスピーチスタイルに関する規範と実際の会話に現れたスピーチスタイルとを比較分析する。被験者と日本人大学生全員が同年代で同じ大学に所属している大学生であるため、主にKSが日本人大学生らと築いていく人間関係の親しさに注目する。

2．先行研究

2.1　日本と韓国のスピーチスタイルに関する研究

日本語と韓国語は言語間の距離が近い言語とされており、特に形式張ったスタイルとそうでないくだけたスタイルを持つ共通点がある。日本語のスピーチスタイル研究では、日本語のスタイルを「です・ます体／丁寧体」と「だ・である体／普通体」（生田・井出 1983、岡本 1997など）に分類する研究や、それに中途終了型を追加して三分類した研究（伊集院 2004）、中途終了型にさらに敬語も含めて四分類した研究（三牧 2013）などがある。しかし、研究によってはその下位分類を分けているものもある。例えば、伊集院（2004）では、「デス・マス体」と「ダ体」をそれぞれさらに三つに分類し、「デス・マス体」に含まれるものとしては「デス・マス体の言い切り」、「デス・マス体＋『ね』『よ』以外の終助詞」、「デス・マス体＋終助詞『ね』『よ』」が、「ダ体」に含まれるものとしては「ダ体の言い切り」、「ダ体＋『ね』『よ』以外の終助詞」、「ダ体＋終助詞『ね』『よ』」があると説明している。同研究で中途終了型としては、「もしできれば」、「～と思って」、「～みたいな」などを例として挙げている。

日本語母語話者の会話でのスピーチスタイルを研究したものとして、劉（2013）がある。劉（2013）では大学院生である日本語母語話者三人の自由会話を録音・録画し、友人同士

三者間でのスピーチレベルシフト[1]の特徴を明らかにしようとした。その結果、基本的には後輩が先輩に「デス・マス体」を、先輩が後輩に「ダ体」を使用しており、規範に基づいた使用が見られた。しかし、会話の途中でスピーチレベルシフトもあり、「ダ体」から「デス・マス体」へのスピーチレベルシフトが行われるのは（１）常套句／会話開始・終了時の合図、（２）相手への非難、（３）対立する立場や意見の提示の場合であり、「デス・マス体」から「ダ体」へのスピーチレベルシフトは（１）自分の意見や心情を一方的に表出する、（２）繰り返しの場合であることが明らかにされた。

韓国語も主に敬意体である「존댓말（チョンデンマル）」と非敬意体である「반말（パンマル）」の二つに区別されることが多い。研究によっては「존댓말（チョンデンマル）」と「반말（パンマル）」の中でも、レベルによってさらに分類されることもある。Brown（2015）は韓国語のスピーチスタイルを、“plain”（*-nunta*）、“intimate”（*-e*）、“familiar”（*-ney*）、“semiformal”（*-so*）、“polite”（*-yo*）、“deferential”（*-supnita*）の六つに分類して述べているが、同研究ではこの中で使用されなくなったものもあるため、今の若い層の話者は主に（１）plain/intimateのミックス、（２）polite（*-yo*）、（３）deferential（*-supnita*）の三つのスタイルを使用していると説明している。しかし、Brown（2015）でpolite（*-yo*）とdeferential（*-supnita*）を“honorific styles”としていることから、大きくは親密さを現わす表現と丁寧さを現わす表現の二つで考えられる。

韓国語のスピーチレベルシフトの現れ方とその要因を研究した金（2013）では、韓国語のスピーチレベルを丁寧体の「합니다（ハプニダ）体」と「해요（ヘヨ）体」、非丁寧体の「해（ヘ体）」と「한다（ハンダ）体」に分類した。それから、映画シナリオから見られる韓国語のスピーチレベルの混用現象を（１）丁寧体と非丁寧体の混用、（２）丁寧体同士の混用、（３）非丁寧体同士の混用の三つに考え、その中でダウンシフトかアップシフトかということに注目した。その結果、（１）ではダウンシフトもアップシフトも本音を吐露する、不満を現わすなどのように聞き手に対して不快感や苛立ちを現わす場合に使用されていた。（２）でのダウンシフトは、命令文で親近感を現わすために使用され、アップシフトは自分の強い意志、もしくは相手への感謝を伝える時に使用されていた。（３）では해（ヘ体）と한다（ハンダ）体のダウンシフトのみ見られ、聞き手への不快感を目的で使用される場合もあったが、親しい関係であることを現わす場合もあった。

以上のように日本語と韓国語はスピーチスタイルの共通点をもつが、それが使われる場面や使い分けの基準については、両言語話者の間で意識の違いが見られる。次に、スピーチスタイルに関する日韓対照研究を述べる。

2.2　スピーチスタイルの日韓対照研究

日韓のスピーチスタイルの対照研究においては、主にその使い方やスタイルの選択と使用に関する意識の違いが述べられている。

長嶺（2008）は、韓国語の非格式体である「パンマル」と日本語の「ため口」の違いに

ついて考察した。同研究によると、「パンマル」と「ため口」は両方各言語では非格式体として認識されているが、「パンマル」は待遇表現の一つとして幅広く使用されている反面、「ため口」は特に日本の中高年層で印象が悪い上に十分に認知されていないため、使用と学習において注意を要すると指摘した。また、内藤（2003）は日本語母語話者と韓国人上級日本語学習者を対象にあいづちのスピーチレベルとそのシフトについて考察した。その結果、日本語母語話者はあいづちを「ウン」、「ソー」、「アー」などのカジュアルスタイルで使用するが、会話開始部と談話の終結部においてレベルシフトが起こることもあった。その反面、韓国人日本語学習者は一定したスタイルを使用せず、レベルシフトにおいても傾向が見られなかった。このようにあるスタイルに対する使い方や意識が違う場合、母国の規範をもってそのまま相手の言語のスタイルを選択すると、コミュニケーションがうまくいかない恐れがある。

鄭（2017）は日韓のスポーツ情報番組を対象に、日韓のスピーチレベルシフトの相違を対照研究した。収集した中継データはアナウンサーと解説者の二人の発話であり、日韓共に男子水泳決勝150メートル時点からの発話であった。その結果、日本語では名詞止めや常体が多用され、韓国語では名詞止めは見られたが常体は使用されず、敬体のみ使用された。同研究ではこの結果を、日本では臨場感を重視し、韓国では報道性を重視すると説明した。それから、田所（2015）は、二年以上日本に留学した経験を持つ韓国語母語話者へのインタビュー調査を実施し、スピーチレベル選択に伴う場面意識を考察した。日本語母語話者による年齢または立場が下から上への普通体使用場面について、五名中四名が違和感を感じていたことを明らかにしている。このように、日韓では会話が行われるジャンルや場面に対する認識が異なることで、スピーチスタイルの選択が異なる場合もある。

以上のように日韓のスピーチスタイルを比較した研究は存在するが、韓国人日本語学習者が日本において日本語母語話者と会話する際に、どのようにスピーチスタイルを意識し、選択しているかについてはまだ実証的研究が少ないと考えられる。

３．調査について

3.1　調査方法と概要

調査は、韓国人留学生KSの協力を得て、友人または知り合いの日本人との会話を録音してもらう方法で実施した。KSには事前に調査の趣旨を説明し、調査同意書に記入してもらった。それから、ICレコーダーを渡し、日本人の相手とそれぞれ30分程度の会話を録音してもらうことを依頼した。会話の話題については特に調査者の方から決めなかった。KSが日本人協力者と会話を録音する際にも、相手に調査同意書に記入してもらうようお願いした。その２か月後、KSから連絡をもらい、KSからデータを渡してもらった。その結果、５本のデータを得て、本研究ではそのうち３本を分析対象とした。その後、KSと個別インタビューを行った。インタビューは韓国語母語話者の調査者が韓国語で行い、

KSが録音した会話の内容の確認を含め、KSのこれまでの日本語学習、日本語接触経験、スピーチスタイルに関する規範、会話した日本人協力者との関係等を質問した。

調査時期は、2018年４月の初めにKSに調査を依頼し、会話の録音はKSが2018年４月から５月にかけて行った。KSとのインタビューは６月末に実施した。

3.2　調査協力者

本研究の調査協力者である韓国人留学生KSと、会話相手の日本人協力者について述べる。

3.2.1　韓国人留学生KSについて

KSは韓国ソウル出身の男性で調査当時23歳であった。韓国の大学で日本語通・翻訳を専攻しており、兵役を終えて大学３年生で日本の大学に交換留学中であった。高校２年生の時、日本語を勉強し始め、日本語学習歴は６年になる。高校では第二外国語の授業を聞きながら独学をし、高校３年生の時にJLPT（Japanese-Language Proficiency Test）１級に合格した。大学ではパートナーシッププログラムや日本人留学生とのルームメイト制度を利用し、日本語の会話を練習した。また、ソウルで日本人観光客を案内するアルバイトもした。兵役中も勉強を続け、JPT（Japanese Proficiency Test）試験で800点以上の点数を取った。このように、KSは交換留学の前から日本語で日常会話ができる日本語上級話者であり、調査者もKSとのインタビューや普段からの会話からKSの日本語学習に対する熱意を感じた。

3.2.2　会話相手の日本人協力者について

KSが自由会話を録音した５名の日本人協力者の中、本研究で分析対象とした３名の概要は次の表１に示すとおりである。本研究では性別がスピーチスタイルに影響する可能性を考慮し、女性である２名を除外し、男性である３名との会話のみを対象にした。

日本人協力者３名は全員男性の大学生で、JS01とJS02はKSより年下であるが、JS03はKSより年上である。また、JS01はKSの前学期のプライベートチューターであり、JS01とは何度も会ったことがあるので初対面ではない。JS02はKSの韓国人の友人のプライベー

表１　日本人協力者の概要

日本人協力者	身分	性別	KSとの年齢関係	KSとの関係	データ収集時初対面か否か
JS01	大学生	男	年下	前学期のプライベートチューター	×
JS02	大学生	男	年下	韓国人友人のプライベートチューター	○
JS03	大学生	男	年上	韓国の大学で2015年に知り合った友人	×

トチューターであり、この調査のために韓国人の友人にチューターを紹介してもらったと言う。そこで、データ収集時には初対面であった。JS03はKSが韓国の大学に通っていた当時にJS03が韓国に留学し、大学で知り合った友人である。韓国でもよく一緒に遊びに行ったことがあり、KSが日本に留学してからも何度も会ったことがあると言う。

4．調査結果

本節で、調査結果についてまとめる。まず、KSへのインタビューから明らかになったKSのスピーチスタイルに関する規範について述べる。そして、本調査で収集した実際の会話と照らし合わせ、規範とのズレが観察されたところについて分析する。

4.1　KSのスピーチスタイルに関する規範

KSへのインタビューで、スピーチスタイルに関する規範は大きく三つの要素について語られていたと分析する。一つ目は「初対面」について、二つ目は「年齢」について、そして三つ目は「親しさ」についてである。以下KSが持つ自分が話しかける際のスピーチスタイルに関する規範と、話し相手に期待する規範それぞれを、この三要素を中心にまとめていく。

まず初対面について、KSはどのような相手であっても必ず丁寧体を使い、相手にも丁寧体で話してほしいと答えた。初対面の相手に年齢に関係なく普通体で話しかけられるのは不快だとした。ただし、日本人学生から普通体で話しかけられることに関しては、日本に留学してから「そういうものだ」と考えるようになったため、不快に思わないと話した。

次に年齢に関しては、初めて会った時は上述のように自分自身からは年齢に関係なく丁寧体を使うが、親しくなったら年上には普通体を混ぜることもあり、年下には普通体に切り替えると報告した。そして、初対面でない場合は、年上の人からは普通体で話しかけられてもいいとし、年下の人からでも仲の良い相手であれば普通体で話しかけられてもかまわないと話した。相手が日本人の場合は、年下から親しい親しくないに関わらず普通体で話しかけられてもいいと考えていた。

親しさに関しては、年齢に関する意識と同様に、自分自身から親しいと思う人には普通体を使うこともあるが、親しくないと思う人には普通体にはしないと答えた。そして、自分が親しいと思っている人からは普通体で話しかけられてもいいと考えていた。

以上から、KSのスピーチスタイルに関する規範は、初対面の場合は丁寧体が望ましいとし、年齢と親しさの二要素は密接に関連していることがわかった。日本人との会話においては、韓国で韓国人と話す時の規範とは異なる規範を持っていると言えそうである。

次の項では、KSのスピーチスタイル選択の実態を見ていく。

4.2　KSのスピーチスタイル選択の実態

本項では、本調査で収集した会話で観察されたKSのスピーチスタイル選択の実態について示し、4.1で述べたKSのスピーチスタイルに関する規範と照らし合わせ、ズレが生じていると思われるところについて分析していく。

4.2.1　スピーチスタイル別発話回数

まず、KSと日本人協力者３名それぞれが使用したスピーチスタイル別発話回数を見ていきたい。スピーチスタイルの分類は、伊集院（2004）の枠組みを参考にし、丁寧体・普通体・中途終了型の３分類にした。

日本人協力者JS01との会話におけるスピーチスタイル別発話回数は、以下の表２に示すとおりである。KSにとってJS01は会話を録音した前学期のプライベートチューターであり、何度も会ったことがあるので、この会話は初対面からのデータではない。年齢はKSのほうが年上である。

JS01は413回の発話のうち、丁寧体167回（40%）、普通体131回（32%）、中途終了型115回（28%）であった。一方KSは301回の発話のうち、丁寧体109回（36%）、普通体156回（52%）、中途終了型36回（12%）であった。JS01は普通体より丁寧体をやや多く使い、KSは丁寧体より普通体を多く使用したと言える。中途終了型に関しては、JS01は115回であるのに対し、KSは36回と少ない。この結果を示した図１を見るとその傾向は明らかである。

表２　JS01とKSのスピーチスタイル別発話回数

	JS01	KS	スタイル別合計
丁寧体	167	109	276
普通体	131	156	287
中途終了型	115	36	151
話者別合計	413	301	714

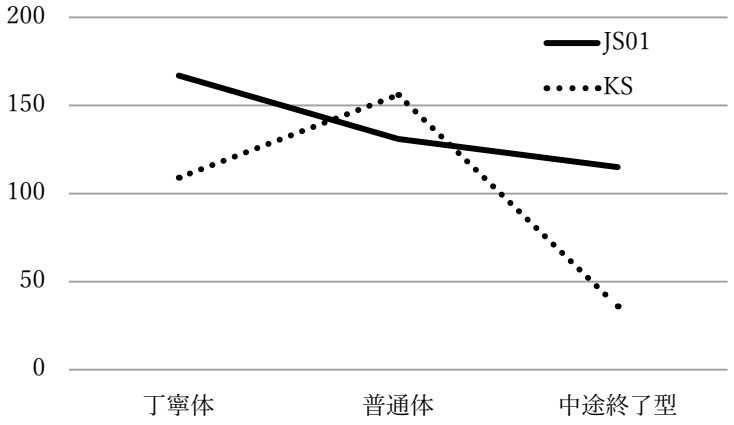

図１　JS01とKSのスピーチスタイル別発話回数

次に、日本人協力者JS02とKSの会話におけるスピーチスタイル別発話回数は、表３に示すとおりである。JS02は503回の発話のうち、丁寧体は13回（３％）とほとんど使用しておらず、普通体を360回（72%）使用した。中途終了型は130回（26%）であった。一方KSは、406回の発話のうち丁寧体が229回（56%）と普通体70回（17%）の使用を大きく上回った。中途終了型は107回（26%）とJS02と同じ割合であった。表３を図に示すと以下の図２のようになる。

JS02は前述のとおりKSの韓国人の友人のプライベートチューターであり、本調査のためにその友人に紹介してもらったため、初対面場面からの会話データとなる。年齢はJS02よりKSのほうが年上である。よって、KSにとっては自身の規範に反した形でのやりとりだったと言えそうである。

そして日本人協力者JS03は、KSが日本に留学する前、韓国の大学に通っていた頃に同大学に韓国留学し、ふたりはそこで知り合った友人同士である。韓国でも親交が深かったが、KSが日本に留学してからも何度も会ったことがあり、来日準備も手伝ってもらうほどの親しい関係であると言う。よって、本調査のために収集された会話データは初対面場

表３　JS02とKSのスピーチスタイル別発話回数

	JS02	KS	スタイル別合計
丁寧体	13	229	242
普通体	360	70	430
中途終了型	130	107	237
話者別合計	503	406	909

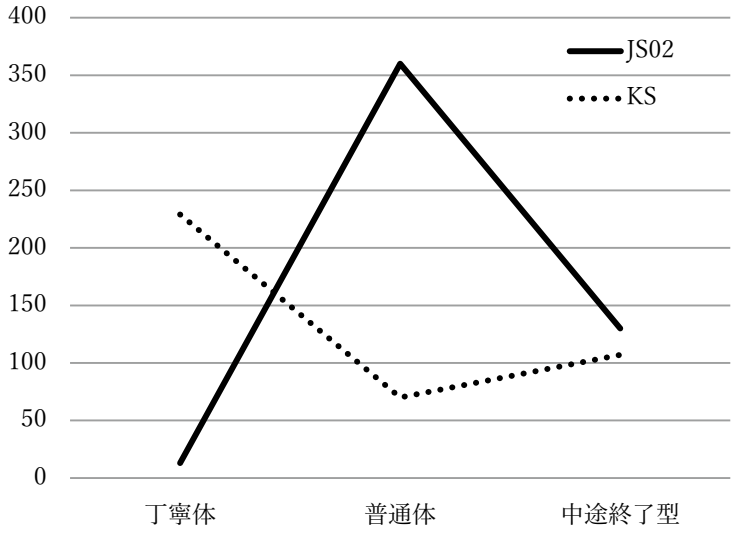

図２　JS02とKSのスピーチスタイル別発話回数

面ではない。また、３つのデータの中で唯一JS03はKSより年上である。JS03とのスピーチスタイル別発話回数は以下の表４に示すとおりである。JS03は発話数201回のうち、丁寧体を１回しか使用しなかった。この１回は、会話データの録音が終わり、最後にKSが「（録音機器を）切りま::す」と言った発話に対してJS03が「は::い」と答えたものである。つまり、JS03はその発話以外は全て普通体（168回）か中途終了型（32回）を使用している。一方KSの丁寧体使用は発話数250回のうち115回（46%）で普通体89回（35%）の使用を上回っている。表４を図に示すと図３のようになる。

表４　JS03とKSのスピーチスタイル別発話

	JS03	KS	スタイル別合計
丁寧体	1	115	116
普通体	168	89	257
中途終了型	32	46	78
話者別合計	201	250	451

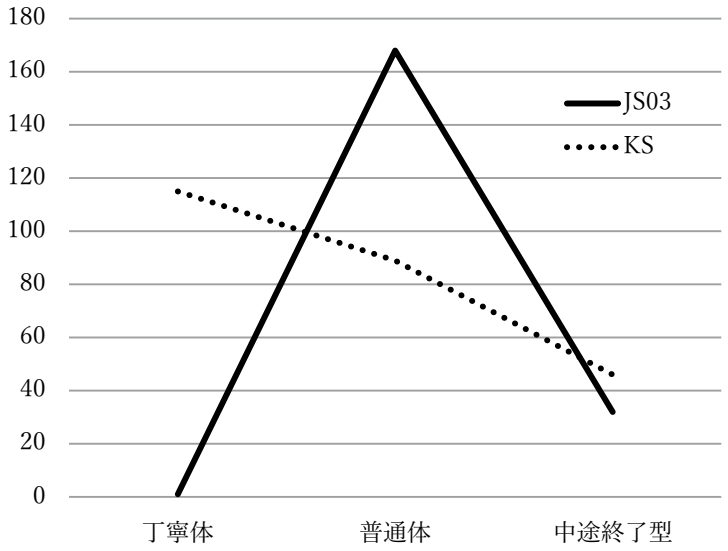

図３　JS03とKSのスピーチスタイル別発話回数

表５　日本人協力者JSとKSが使用したスピーチスタイルの傾向

日本人協力者	JS－＞KS	KS－＞JS
JS01	丁寧体と普通体	丁寧体と普通体
JS02	普通体	丁寧体
JS03	普通体	丁寧体と普通体

以上、KSと日本人協力者３名が使用したスピーチスタイルの傾向をまとめると、表５のようになる。日本人協力者とのそれぞれの会話において、JS01は丁寧体と普通体両方を、JS02とJS03は普通体を主に使用していた。KSはJS01との会話では丁寧体と普通体両方を使用し、JS02との会話では丁寧体を、JS03との会話では丁寧体と普通体両方を使用していたと言える。

次の項では、会話データにおけるこれらのスピーチスタイル選択の実態と、KSのもつスピーチスタイルに関する規範を比較し、ズレが生じていると思われるところについて例示しながら分析していくことにする。

4.2.2　KSの規範とのズレ

本項の最初でKSのスピーチスタイルに関する規範をもう１度整理しておく。

（１）初対面について

自分自身は丁寧体を使う。相手にも丁寧体を使ってほしい。

（２）年齢について

最初は年上にも年下にも丁寧体を使うが、親しくなったら年上には普通体を混ぜることもあり、年下には普通体に切り替える。相手が年上の場合は普通体で話しかけられてもかまわない。年下の場合は親しければ普通体で話しかけられてもよい。

（３）親しさについて

親しくなったら年上には普通体を混ぜ、年下には普通体に切り替えて話す。親しくない人に関しては、年齢に関係なく普通体に切り替えない。

この規範に基づいて、日本人協力者それぞれとの会話で、KSの実際のスピーチスタイルの選択とズレが生じていると思われるところについて、一箇所ずつ例を挙げながら分析する。例文にある記号の「：」は、記号の数程その音が伸びることを意味する。

まずJS01との会話を見る。次頁に示す例１は、所属大学における授業と定期試験についてKSがJS01に質問している部分からの抜粋である。左にある行番号は発話番号を示す。JS01はKSより年下であり初対面会話ではないにもかかわらず、KSは丁寧体を混用していることがわかる。つまり、KSの３回の発話のうち、66発話目と68発話目は丁寧体を使用し、70発話目は普通体を使用している。JS01に関しても、３回の発話のうち、65発話目は丁寧体だが、67、69発話目は普通体を使用しており、丁寧体と普通体を混用している様子がわかる。

このことについてKSはインタビューの中で、「親しくないわけではないがなぜか丁寧体を

（例１） KSとJS01の会話抜粋：大学の授業と定期試験

行	話者	発話内容	スタイル
65	JS01	うーん、先生の特色が出るんですよ：	丁寧体
66	KS	うーん、基準ってあるじゃないですか	丁寧体
67	JS01	基準って何？	普通体
68	KS	60、60から69点までが可なんですけど、 良ならまぁわかる、テストだめだったんだって	丁寧体 普通体
69	JS01	うん	普通体
70	KS	でも中間と期末、平均点70にならないとはまず、はずないと思った	普通体

使ってしまう」と話した。ただ、「自分が先にため口にしていたら、もっと仲良くなれたかもしれない」とも話した。つまり、KSはスピーチスタイルの使用に関して比較的はっきりした規範を持っているにも関わらず、自分自身がJS01に対して丁寧体を混ぜている理由については説明できなかったことになる。さらに、このKSのインタビューでの発話から、KSとJS01の「親しくないわけではない」が「もっと仲良く」なれる余地がある関係性が明らかになり、このような関係性が二人の会話における丁寧体と普通体の混在に現れていると考えられる。

次にJS02との会話を見てみる。以下に示す例２は、KSとJS02が初めて会い、挨拶をし

（例２） KSとJS02の会話抜粋：最初のあいさつ

行	話者	発話内容	スタイル
1	JS02	はじめまして	（挨拶）
2	KS	はじめまして	（挨拶）
3	JS02	JS02（氏名）です	丁寧体
4	KS	KS(氏名）と申します	丁寧体
5	JS02	KS(氏名）さんね はい	普通体 丁寧体
6	KS	はーい、えっとD(韓国人友人の名前）たちと何してますか	丁寧体
7	JS02	うん？ （略）	普通体
11	JS02	えっとね、以前、その：：今やってるチューターとは（略）	普通体
12	KS	はい	丁寧体
13	JS03	報酬が出ないチューター	普通体

ている場面からの抜粋である。KSはすべての発話で丁寧体を使用し、JS02は３発話目で丁寧体「です」を使って名乗った以外は普通体を使用した。

初対面でありながらJS02が普通体のみで話しかけてきたことについて、KSはインタビューの中で「日本人は留学生にため口を使うということを知っていたので、今更驚くことでもない」と話し、「この子もそうなんだ」と思って状況を受け入れた、と話している。日本人との会話においては、日本人学生が初対面の留学生に普通体で話すことを何度も経験したことから、韓国にいた時とは異なる、日本人との接触場面における新しい規範が作られたと言えよう。一方でKS自身は丁寧体を多く使用し（406発話中229回）、普通体をほとんど使用しなかった（406発話中70回）ことから、自身が話す際の規範は「初対面では丁寧体を使う」という従来のものを守って会話をしていたことになる。このことから、KSは本来自分が持っているスピーチスタイルの規範に反することがあっても、そのズレを日本人との会話における特徴の一つとして受け入れていると考えられる。

最後にJS03との会話を見てみる。以下の例３は、KSとJS03が日韓の文法の違いについて話しているところからの抜粋である。初対面場面ではなく、JS03は2015年から友人である日本人学生で、KSはインタビューの中で「最も親しい関係」だと報告した。しかし、実際のやりとりを見てみると、KSは丁寧体と普通体を混用しているものの、発話250回中115回丁寧体を使用し、普通体の使用は89回にとどまっており、親しい関係でも丁寧体を多く使っていた。例３に示す例の中でも、KSの発話は普通体のみを使用するJS03との発話とは対照的で、79発話目の中途終了型以外の発話は丁寧体を使用した。

このことについて、KSのインタビューの中から、本人は丁寧体と普通体を混用していると認識はしていたが、最も親しいと思っている相手であるにも関わらず丁寧体を使って

（例３） KSとJS03の会話抜粋：日韓の文法の違いについて

行	話者	発話内容	スタイル
76	JS03	いやだと思う	普通体
77	KS	そうそうそうそう。で、韓国語ってそういうのないじゃないですか	丁寧体
78	JS03	ないか…	普通体
79	KS	文法的な理由でこれはだめ、その、言葉の選択は結構私もしてるし	中途終了型
80	JS03	うん	普通体
81	KS	なんですけど、文法的な理由でこれは使っちゃだめというのはまずないです、私が思うには	丁寧体
82	JS03	文法的な理由でおかしいなって思うことにはあんまり出会わないってことかな	普通体

いる理由について、やはりJS03は年上であるためだろうと自己分析した。つまり、KSの規範通りなら親しい関係であるJS03には普通体を使用してもいいが、実際丁寧体を多めに使う傾向があることから、実際の会話では親しさよりも年齢を重視していると言えよう。

5．まとめ及び考察

本研究では、韓国人留学生が日本人大学生と会話をする際にどのような規範を持っており、実際その規範がスピーチスタイルの使用においてどう現れているかを明らかにするために、韓国人留学生KSと日本人大学生との会話データやKSへのインタビュー・データを収集した。その結果、KSのインタビュー・データから、KSは初対面であるか、年齢の差があるか、親しいかという三つの基準に関して規範を持っていることが明らかになった。そして、KSはインタビューでスピーチスタイルにおける規範を、自分が相手に話しかける時と、相手に話しかけられる時で同じように適用されるだろうと語っていた。しかし、その規範とKSの実際の会話で現れたスピーチスタイルにはズレが生じていた。

まず、JS01との会話データでは、普通体に切り替えることでより親しくなれるという意識はあったものの、実際には完全に切り替えることができていなかった。しかし、その理由については「なぜか」としか言わず、KS本人も説明はできなかった。

JS02との会話データでは、相手が日本人であることから、KSの日本での経験を通して形成された「日本での規範」が適用され、相手のスピーチスタイルが自分の規範に反していても受け入れていた。しかし、KSは自分自身が話す時に関しては、相手が日本人であることを理由に普通体を選択することはなかった。

最後にJS03との会話データでは、KSがJS03を協力者の中で最も親しい人だと語っていたが、まだ親しいとまでは言えないJS01には丁寧体より普通体を若干多めに使用していたこと、またJS03がKSに対して丁寧体をほとんど使用していないことを含めて考えると、KSがJS03に対して感じる親しさがスピーチスタイルには表れていなかったと考えられる。

以上のことから、韓国人留学生が日本で人間関係を構築する際に、スピーチスタイルの選択が原因で自分が期待する関係が築けていない可能性があると考えられる。留学生が日本語のスピーチスタイルを学習しその仕組みを理解しているとしても、実際日本人と会話する場面ではJS02との事例のように年下の初対面の相手から普通体で話しかけられる状況に遭遇することもあり、JS01とJS03との事例のように相手に対して感じる親しさをスピーチスタイルに十分表せていないこともあり得る。このことから、日本語非母語話者が日本語のスピーチスタイルの仕組みを理解することと、実践は別であり、日本語教育においてもスピーチスタイルの形を理解させる教育だけではなく、学習者がうまく実践できるようにする教育を工夫する必要があることが示唆される。

6．おわりに

日本語のスピーチスタイルの選択は、人間関係の構築に大きく影響するものである。KSの事例のように、自分が感じる相手への親しさをスピーチスタイルにうまく現わすことができず、相手に一歩近づけないこともある。また、KSは初対面で自分に普通体を使用してくる相手を受け入れたが、人によっては自分に対する相手のスピーチスタイルを不快に思い、互いに誤解が生じることもあり得る。本稿は、KSという一人の留学生に注目したが、今後はより多くの留学生のデータを収集し、分析を行いたい。そして、日本人学生へのインタビューも実施し、両側面からスピーチスタイル選択と人間関係構築の関係を明らかにしていきたいと考える。

参考文献

生田少子・井出祥子（1983）「社会言語学における談話研究」大修館書店『言語』12(12)、77-84。

伊集院郁子（2004）「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け―母語場面と接触場面の相違―」社会言語科学会『社会言語科学』6(2)、12-26。

岡本能里子（1997）「教室談話における文体シフトの指標的機能―丁寧体と普通体の使い分け」明治書院『日本語学』16、39-51。

金アラン（2013）「韓国語のスピーチレベルシフトの現れ方とその要因をめぐって：映画シナリオをデータとして」『韓国語学年報』9、55-78。

鄭惠先（2017）「スポーツ情報番組のジャンルによる語用論的特徴―日韓対照で見られるスピーチレベルシフトの相違に注目して―」『北海道大学国際教育研究センター紀要』21、1-13。

田所希佳子（2015）「スピーチレベルの選択に伴う場面認識に関する考察―韓国人留学経験者へのインタビューから―」『社会言語科学』18(1)、50-59。

内藤真理子（2003）「あいづちのスピーチレベルとそのシフトについて：日本語母語話者と韓国人学習者の相違」国際交流基金日本語国際センター『世界の日本語教育』13、109-125。

長嶺聖子（2008）「韓国語の「パンマル」と日本語の「ため口」の違いに関する一考察―待遇表現の指導方法と関連して―」『留学生教育:琉球大学留学生センター紀要』5、19-33。

Brown, L. (2015). Revisiting “polite” --yo and “deferential” --supnita speech style shifting in Korean from the viewpoint of indexicality. *Journal of Pragmatics* 79. 43-59。

三牧陽子（2013）『ポライトネスの談話分析―初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版

劉雅静（2013）「友人同士３者間会話におけるスピーチレベルシフトについて―上下関係のある親しい友人同士の会話データをもとに―」筑波大学一般・応用言語学研究室『言語学論叢 オンライン版』6（通巻32号）、34-48。

註

1　スピーチスタイル研究には、同様のものを指す用語として「スピーチレベル」「文体」などがあるが、本稿の先行研究では原文の用語をそのまま引用することとする。